

14 中世における瀉血

藤倉 一郎

ガレノスの業績

西ローマ帝国の滅亡による古代文化の崩壊とヨーロッパ全体の混乱によって、古代ギリシャ・ローマ医学は没落し、病理診断は軽視され、薬剤療法が偏重されて、民間医療、神秘医療が盛んになったのである。エラシストラトス一派の瀉血反対論もあつたのであるが、ガレノスの堅固な論理と時代の水準を抜いた科学的方法によって構築された不可侵の殿堂ともいえる教義は宗教的な面をもつた目的論がイスラム文明とイスラム医学の世界にスムーズに受け入れられて、更に中世キリスト教会の認知によって権威づけられ、中世、近世を通じて瀉血は治療法として全盛期を迎えるのである。

ビザンツ医学

西ローマ帝国が減じると、キリスト教は確立され、ローマ文化は壊滅の危機にさらされることになったが、僅かに東ローマ帝国に生き延びた文化はビザンツを中心として、古典の散逸を避け伝統を忠実に維持したのである。そして六世紀のアエテオス、アレキサンドロスから一四世紀までローマの文物、制度をそのまま継承し伝統保全につとめ、細々と命脈を保った。

アラビヤ医学

一方サラセン帝国を中心としたアラビヤでは、アレキサンドリヤ、シリヤ、ペルシャ、ローマの文献をアラビヤ語に翻訳して、アラビヤ医学を確立するのである。十世紀から十一世紀にかけて、医学府庫のラーズェス、アブル・カシム、医学典範のアヴィセンナなどがあらわれ、ギリシャ・ローマ医学を基としたアラビヤ医学の全盛期を迎えるのである。

サレルノ医学

僧徒医学の外にあつて、古代ギリシャ・ローマの偉業を守り、これを再び隆盛させたのがサレルノ医学である。サレルノ医学校は九世紀に設立され、十二世紀コンスタ

ンチヌス・アフリカヌスによってギリシャ語やアラビヤ語からラテン語に翻訳された古代医学を学んだのであった。個人の衛生はサレルノ養生訓に基づいて沐浴、吸角、下剤がおこなわれていた。サレルノについて、十二世紀から十三世紀にかけては、ポローニヤ、パドヴァ、モンペリエ、パリ大学が設立されて解剖学なども行われるようになった。

スコラ医学

十一世紀キリスト教とアリストテレス哲学の結びつきによって、神と自然との一致を説きサレルノ大学について起こった沢山の大学もスコラ学風の養成に一役かった。医学は因襲を重んじアラビヤから伝わったアリストテレス、ガレノス、アヴィセンナなどの大家の著述の解釈とそれに関する討論が主眼であった。

瀉血の状況

医師の一段下に床屋外科医や湯屋外科医がいた。この床屋外科医が修道院や僧庵で髪剃りや養生法としての定期の瀉血をした。その他に手術刀の研磨、軟膏の調整、屍体解剖の執刀、ペストの外科的処置、骨折、脱臼、創

傷小外科などをおこなった。精液うつ滞の当然の結果としておこる血液腐敗を避けるために、瀉血の他に方法はないと考えられていた。修道僧は年数回瀉血を行い、瀉血休日が制定されており、瀉血のために甚だしく衰弱したものは強壯飲料を服用して回復を計った。一般人も吸角や静脈瀉血を健康法として占星術で定められた季節に行った。

沐浴は中世全般にわたり一種の衛生法として重要であり、温湯浴、蒸気浴、薬浴などがおこなわれた。一三八年フランクフルトでは二九軒の湯屋があり、一四八九年ウルムでは一六八軒の湯屋があったといわれている。このように浴場は普及しており、ここに湯屋外科医がいて吸角、瀉血、髪剃り、あるいは骨折、脱臼の治療をしていた。

(二期会藤倉医院)